



The Cinema of UCG Choice

意味不明なカッコ良さ、
そんなボンド・カーが見たい。

『007 カジノ・ロワイヤル』

12月1日 公開
サロンパスルーブル丸の内ほか
全国にて

007史上最も人気を博したボンド・カーといえば、装備満載で初登場したアストン・マーティンDB5(『007 ゴールド・フィンガー』)、水陸両用のロータス・エスプリ(『007 私を愛したスパイ』)、そしてリモコン操作できるBMW750iL(『007 トゥモロー・ネバー・ダイ』)だろう。中でもBMW750iLはこの映画の影響で大きく売り上げを伸ばした。広い駐車場をまるで踊るようにクルクルと動き回るBMWの姿は、ボンド・カー＝アストン派の脳

裏にも悔しいほど鮮烈に焼きついている。もちろん普通の人を買うクルマはリモコン操作なんてできないが、要はあのボンド・カーに乗っているという



気分である。BMWの戦略は明確だ。ボンド・カーはオモチャとしてのクルマの究極の形、それをこれでもかと思えることは映画的にも宣伝戦略的にも正しい。プロダクト・プレイズメントの大成功例と言えらるだろう。

BMW時代は3作で終わり、アストンがその座を奪い返したのは前作から。最新作『カジノ・ロワイヤル』では、特別仕様のDB5がボンド・カーとして登場する。物語は小説シリーズの第1作目、スパイになったばかりのジェームズ・ボンドの初任務を原作にほぼ忠実に描いてゆく。自信過剰でいきがった新米スパイは、あわや殺され

そうになったり、女に惚れて英国情報局(MI6)に辞表を出したりと、かなり人間臭い。新たにボンド役として登場したダニエル・クレイグのために、人気のピアース・ブロスナンとは違うリアルなキャラとストーリーを用意したのだろうが、これが“いわゆるボンド・カー”の荒唐無稽さと相容れない。結果DB5は「プロ仕様の救急箱付き」という程度の装備しかない普通のクルマである。まあそれは仕方ないとしても、DB5以

外に見せようとするクルマが多すぎるのはいかかなものか。'64年型DB5の登場はご愛嬌だが、フォード・モンデオで乗り付ける場面はしっくりこない。MI6

の支給車とは思えないし、まさかレンタカー……それじゃボンドじゃない。

前作『007 ダイ・アナザー・デイ』ではV12ヴァンキッシュとジャガーXKRの氷上チェイスがすぐに魅する。あれこそプロダクト・プレイズメント。たとえ商売ずくだろうがカッコよければこっちは満足なのだ。なのに、どうしたんだ、フォード。その不採算に、戦略の迷いを感じずにはいられない。

渥美志保

映画ライター、コラムニスト。数々の人気雑誌に映画関連のコラムを執筆している。映画に登場するクルマで最も好きなのはボンド・カーのアストン・マーティン。